様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月６日現在

機関番号：12601
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：平成 19 年度　～　平成 22 年度
課題番号：19320045
研究課題名（和文）　１８～１９世紀の英米文化交流の実証的研究

研究課題名（英文）　A Study of Transatlantic Relationships in Various Fields of Culture in the Eighteenth and Nineteenth Centuries

研究代表者 平石貴樹
（　HIRAISHI TAKAKI　）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：10133323

研究成果の概要（和文）：本研究では 18～19 世紀英米文化交流の実証的な調査を通して「蓋然性」という鍵語の重要性を再発見し、従来前提とされてきた言説移行の歴史に対しあらたな見方を提示することとなった。

研究成果の概要（英文）：We investigated various aspects of transatlantic relationship with a special focus on literature in the eighteenth and nineteenth centuries. One of our achievements was to reassess the idea of 'probability' to remap the history of literary discourse during the period in question.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 19 年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
平成 20 年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
平成 21 年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
平成 22 年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
年度			
総　計	15,200,000	4,560,000	19,760,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：英米文学
キーワード：英米史

１．研究開始当初の背景

1)イギリス産業革命の発展期の２世紀間は、植民地アメリカが拡大し、独立をはさんでおなじく産業化社会としての相貌をあらわす期間でもあり、小説類や雑誌などの活字文化の隆盛・定着期にも重なっている。この間の両国間の文化的交流は、ごく大雑把にはアメリカにおけるイギリス文化の一方的輸入から相対的独立への過程として、あるいはイギリスにおける新しいアメリカ人への評価の向上の過程として、従来から理解され、議論されてきたが、こうした従来の理解は、しばしば両国の雑誌出版や書籍輸入についての実証的で詳細な研究を欠き、また文化交流の階級的な多様性を看過しがちであった結果、重要な諸側面を取り逃した、一面的な説明に堕するきらいがあった。それら重要な諸側面とは、本研究の視野の範囲で言えば、第一にこの期間には意外に多くの作家や思想家が両国の雑誌に寄稿しており、両国がつねに緊密な文化的構造関係を形成していたと考えられること。第二に、国際著作権法が成立していなかった両国間において、いわば海賊版文化が形成され、大衆小説などの厖大な相互交通が両国の文化それぞれに大きな影響力を持ったと考えられること。たとえば１９世紀アメリカでもっとも信頼される出版社の一つとなったハーパーズ社も、海賊版の大流行によってその財政的基礎を築いたと言われる。

2)その結果第三に、ベンジャミン・フランクリンなどの有名人だけではなく、スピリチュアリズムの霊媒師などがアメリカからイギリスに渡って歓迎され、大衆レベルでの国境を越えた文化現象を現出したと考えられ、また同時に、イギリス作家のアメリカ講演旅行やシェイクスピア劇団のアメリカ公演など、イギリスからアメリカへの文化文物の輸入についても、従来個別的、エピソード的に扱われていた限界を越えて、密接に関わりあう文化事象として構造的に考察する必要があること。このように複雑に絡み合った諸事情の結果、ほんの一例を挙げるなら、アメリカにおいてウォルター・スコットやチャールズ・ディケンズがそれぞれの時代において、アメリカでもっとも重要な作家だと考える批評家や出版者が数多く存在したのである。ただし、このような一体性、共通性に立脚しながらも、むしろそうした共通性を前提とすることによって、両国文化のその後の相違や独自性を見きわめることがあらためて必要となることは言うまでもない。

２．研究の目的

1)上記の観点にもとづき、本研究は、実証的な資料研究に十分な注意をはらいながら、密接な文化交流の実情をあきらかにすることを目標とした。研究の焦点を明確化するために、両国の文学と文化を代表する作家や現象に当面の調査対象を絞り、それらに通底・あるいは相互関連する問題点を整理し、議論するという方法を採ったのである。言うまでもなく、こうした研究の背景には、戦後わが国において、イギリス文化とアメリカ文化を異なるものとして、どちらかと言えばアメリカ文化を近代的で新しいタイプのものとして、軽々に論じ、またそれぞれの専門家にゆだねてきた趨勢を反省し、ありうべき英米文化の包括的研究を模索する意図が込められている。

2)具体的には、まず、後に述べるようなトピックを念頭に置きながら、イギリス、アメリカ両国の古雑誌を渉猟し、相手国に寄稿した思想家や文学者の発表作品とそれらに対する反響を調査し、整理した。次に、相手国で出版された思想・文学作品をめぐる雑誌書評を収集し、本国における書評との比較研究をおこなった。その場合、いわゆる有名作品だけではなく、海賊版によって出版された部類の大衆的作品にも十分に注意を払ってきた。

3)こうした作業を通し本研究では、近代の「知」の枠組みが形成されるに際して大きな力をもったいわゆる「英米的」思考の展開過程を、具体的な出版活動やイヴェント、人間関係、組織連合といったマテリアルな側面から実証的に跡づけ、今後の研究の足がかりとなるような資料体系の構築を目指したのである。その際にひとつの焦点となったのは、イギリス側がアメリカに対して持つイメージと、反対にアメリカ側がイギリス側に対して持つイメージとの間に奇妙なねじれが見られたこと、また、双方のお互いに対する誤解や嫉妬、恐怖、親愛感、安心感、憧れなどが、それぞれの文化の方向を形成するに際しても大きな意味を持ったことなどであった。従って、こうした要素について具体的な資料の助けを借りながらテーマごとに整理概観することで、そもそもどのようなことが相互理解において意味を持ちうるのかといった議論につなげてきた。

３．研究の方法

研究目的において述べたように、１８～１９世紀のあいだ英米両国では、非常に多くの作家や思想家が国境を越えて両国で著作を出版し、また雑誌にも寄稿しており、両国がつねに緊密な文化的構造関係を形成していたことを裏書きする。研究協力者の専門分野を考え、本研究は次のような分担体制をとった。

1)大橋（イギリス演劇専攻）――近年、大橋自身のイニシアチブもあって、学会その他において大いに注目を集めてきた「文化学」の理論と、シェイクスピア受容に関する歴史的視点を拠り所としつつ、具体的にシェイクスピア作品がどのような形でアメリカのマーケットに訴えていったかを実証した。文化学については、大橋自身の手によって日本語に翻訳されてきたエデワード・サイード『文化と帝国主義（１）～（２）』『故国喪失についての省察（１）』、テリー・イーグルトン『文学とは何か』、『文化とは何か』といった著作によって提供されてきた斬新な批判的視点をとりこむことで、資料収集の効率をあげた。とくに、アメリカの独立直後に急速に人気が高まったシェイクスピアのアメリカにおける出版と上演の経過の調査は、アメリカ社会にとってシェイクスピアとはなんだったのかを明らかにすることにつながった。

2)阿部（英米詩専攻）――詩人ヘンリー・ワーズワス・ロングフェロー、とりわけロングウェローとアルフレッド・テニソンとの関係に焦点を当て、書評その他の評価、海賊版の出版などを調査して、ロングフェローのイギリスにおける位置を明らかにし

た。テニスン研究の金字塔といわれるクリストファー・リックスによる一連の調査をひな形としつつも、テクスト中心主義の陥りがちな閉塞を大橋的方法の力を借りて乗り越え、文献学的アプローチに新視点を導入した。

またスピリチュアリズムなどアメリカの宗教活動のイギリスにおける展開については、１９世紀末まで視野をひろげ、マダム・ブラバツキーのような大衆一般にまで名前の知られた人物の周辺資料を調査するとともに、カンディンスキーやモンドリアンといった、従来は高踏的な芸術ジャンルに分類されてきた作家たちが、いかに大衆的なものと密な関係を保っていたかをあらためて明らかにした。

3)高橋（イギリス小説専攻）――イギリスにおいて人気が高かったことで知られている小説家ワシントン・アーヴィング、とりわけアーヴィングを高く評価したウォルター･スコットとの関係を調査し､分析した。その際、スコットが居住したエディンバラの高級文芸誌『エディンバラ・レビュー』のアーヴィングに対する評価をも考慮した。

高橋はすでにスコットランドの作家ジェームズ・ホッグに関する詳細な研究書を上梓しているが､そこで展開された方法には､理論と実証性、およびテクストの精密の読解をお互いに有機的に関連させるきわめてバランスのよいアプローチがとられている。イングランドとスコットランドの間にある微妙な政治的・地理的関係を、文学者同士の影響関係などを通して見事に明らかにした方法を、今回高橋はイギリスとアメリカという、より大きな関係性を扱うに際しても適用した。

4)平石（アメリカ文学専攻）――従来平石は精神分析的方法を得意としてきたが、フォークナーをめぐる膨大な資料調査の経験をふまえて、フォークナー以前の、いわゆる感傷小説などを徹底的にマテリアルな側面から調査する方法にも着手しはじめた。いわゆる古典作品とは対照的に、広範な読者層を獲得したこのような大衆性の強い作品の受容過程の研究は必然的に、書物の出版事情、流通過程といったファクターへの目配りを必要としてきた。

本研究において平石は、アメリカにおけるウォルター・スコットに焦点を当て、書評その他の評価、海賊版の出版などを調査し、文学的影響にとどまらず、スコットのアメリカにおける位置を明らかにした。また､１９世紀の代表的な文芸雑誌だった『リタラリー・ワールド』誌におけるイギリス作家の寄稿、イギリス作品の書評をも調査し、分析した。

5)柴田（アメリカ文学専攻）――アメリカにおけるチャールズ・ディケンズ受容に焦点を当て、書評その他の評価、海賊版の出版などを調査し、ディケンズのアメリカにおける位置を明らかにした。またフランクリンや彼の『自伝』のヨーロッパにおける活動と評価について、とりわけ彼がアメリカ人（ヤンキー）の代表として目されるようになった経緯を調査し、分析した。

４．研究成果

本研究の成果のひとつの集大成となったのは代表者の平石貴樹により出版された『アメリカ文学史』である。６００頁近い分量を持つ本書には、本研究において共同研究者とともに進められた研究の成果がふんだんに盛り込まれており、たとえば１８章の「大衆の時代としての１９３０年代」などでは、推理小説、ハードボイルド小説、ゴシック小説などが論じられるに際して、高橋和久による推理小説に関する調査の結果や、大橋洋一によるゴシック小説に関する知見が大いに反映されている。本研究は１８～１９世紀という時代に焦点をあてるものだが、当然ながらこの時代に関する調査研究は、２０世紀という時代の考察の基礎ともなるものである。同じことは同書第１５章の「モダニズムの詩人たち」についても言える。元々モダニズム研究から出発した阿部の１８～１９世紀についての研究は、モダニズムという時代を数百年にわたる歴史的な視点から考え直すという本書の考察にも生かされている。さらに加えて本書の大きな特色と言えるのは、１８～１９世紀の英米交流に関する研究という土台を生かした上で、ポストモダン小説などの一見過去との決別を宣言したかのような作品について､「はたしてほんとうにそれは決別なのか？」という考察が行われているということでもある。このあたりは、柴田がこのところ積極的に取り組んでいる英米の枠をこえた調査研究に追うところが多い。ポストモダン文学にも詳しい柴田は、他方でオスカー・ワイルド、ジョゼフ・コンラッド、ジェームズ・ジョイスといった作家に関する研究を進め、その成果は自身の編集する『モンキー・ビジネス』にも一連の翻訳として発表されているが､『アメリカ文学史』ではこうした柴田の研究を生かし、それと連動する形での考察を行っている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５　件）
①高橋和久、羊飼いの手紙、英語青年、査読無、9月号、2007、350-52

②平石貴樹、アメリカ小説の登場人物たち、英語青年、査読無、6月号、2007、134-35

③柴田元幸、自虐の向こうへ―リン・ディンとマイノリティ文学、査読無、1 号、2008、79-88

④高橋和久、何かを棚上げして読むオースティン、査読有、ジェイン・オースティン研究、2号、2008、１－２１

⑤阿部公彦、軸足―ウィリアム・フォークナー『アブサロム、アブサロム！』、Web 英語青年、査読無、6-7月号、2009、5-13/5-20

〔学会発表〕（計　２件）
①Takahashi Kazuhisa, Some Remarks on the English Literary History, BK21 Programme, 9th Oct 2008, Sungkyunkwan University

②阿部公彦、シェイクスピアの恋愛術―『コピペする語り手』の演出をめぐって、日本英文学会九州支部大会・シンポジウム「どう読むか、イギリス恋愛詩」、2010年10月30日、九州大学箱崎キャンパス

〔図書〕（計　３件）
①柴田元幸（編）、文字の都市―世界の文学・文化の現在１０講、東京大学出版会、2007

②田中久男監修・亀井俊介・平石貴樹編、アメリカ文学研究のニュー・フロンティア、南雲堂、2009

③平石貴樹、アメリカ文学史、松柏社、2010

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
平石貴樹　　(HIRAISHI TAKAKI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：10133323

(2)研究分担者
高橋和久（TAKAHASHI KAZUHISA）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：10108102

柴田元幸（SHIBATA MOTOYUKI）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：90170901

大橋洋一　(OHASHI YOICHI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：20126014

阿部公彦（ABE MASAHIKO）
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：30242077